

2008年度第2学期共通教育科目
「哲学基礎B」
「認識するとはどういうことか？」
第5回講義
(2008年11月6日)

§4 経験的な知識はどのように
して得られるのか

1、ア・プリオリな知識と経験的知識

- 通常、知識は、経験的な知識と非経験的な知識に分けられる。非経験的な知識とは、論理学や数学の知識である。これらが真であることは、経験によらずに知ることが出来る。これらは経験より前に知られるということから、a priori(より前ものから)という意味で、ア・プリオリな知識と呼ばれる。これに対して経験的知識は、a posteriori(より後のものから)というみでア・ポステリオリな知識と呼ばれる。



アприオリな知識は、前回見たように、現代ではそれを自明な真理と考えることはできず、規約に基づくものとされる。しかも、規約主義のパラドクスがあるために、それをどのように理解するのかは、現代哲学の非常に重要な問題になっている

* 根源的規約主義が一つの提案であるが、それではなお説得力に乏しいと思われる。むしろ、究極的には、それは命題知ではなくて、推論したり数を数えたりする技能知に属するものではないかと思われる。

2、経験的な知識にはどのようなものがありますか？

■ きのうBarak Obamaが次のUSA大統領に



選ばれました。
彼について知っていることを
教えてください。



- ① 感覚に基づくもの
- ② 記憶に基づくもの
- ③ 推論に基づくもの
- ④ 伝聞に基づくもの

■ では、この中で、より基礎的なものはどれでしょうか。

- 伝聞の知識はどのようにして得られたのでしょうか。
- 伝聞は、他の人の知識に基づいています。では、その人はその知識をどうやって手に入れたのでしょうか。それはまたしても伝聞であるか、あるいはそうでなければ、他の三つの仕方でしょう。④は①②③に還元されます。

- では、推論に基づく知識はどのようにして得られたのでしょうか。
- 推論は論理法則も前提しますが、それは経験的知識ではないので、それを他の知識を前提しています。その前提となる知識はどのようにして得られたのでしょうか。それもまた推論によって得られた可能性があります。もしそうでなければ、それは①か②か④によって得られたのでしょうか。③は、①②④に還元されることとなります。ところで、④は①②③に還元されました。したがって、まとめると、③と④は、①と②に還元されることとなります。

- では、記憶による知識はどのようにして得られたのでしょうか。
- それは①か③か④によって得られたはずで
す。そうすると、②は、①③④に還元される
こととなります。③と④が①と②に還元される
こととまとめると、②と③と④は、①に還元され
ることとなります。

- では、感覚による知識はどのようにして得られたのでしょうか。

3、感覚による知識にはどのようなものがありますか？

- オバマの写真を見て、
- 感覚によって解かること
- を述べてください。
- 彼は、黒人だ。
- 彼は、背が高い。
- 彼は、男性だ。
- 彼は、老人ではない。
- 彼は、白いシャツを着ている。
- 彼は、黒い背広を着ている。
- 彼は、やせている。
- 彼は、メガネをかけていない。



- オバマの写真を見て、今度は
- 感覚だけによって解かること
- を述べてください。

- 彼がオバマだとわかるのは感覚だけによるのではない。
- 彼が男性であるとわかるのは感覚だけによるのか？
- 彼が老人であるとわかるのは感覚だけによるのではない。
- 「白いシャツ」や「黒い背広」が解るためには、感覚だけでは不十分である。



感覚だけによって解るのは次のようなこと
だけではないでしょうか？

- **視覚** 色、形、大きさ、運動、
- **聴覚** 音色、音程、音量、リズム、抑揚、
音源の動き
- **触覚** 質(熱さ、冷たさ、ざらざら、つるつる、
痛み、など)、その強度
広がり、感覚の運動
- **味覚**、質、強度
- **臭覚**、質、強度

では、それ以上のことはどうやってわかる
のでしょうか？

- 感覚を比較して、一致、不一致を直観することが必要です。
- 感覚についての知識を得るには、言葉が必要です。
- 感覚を組織立てるためには、例えば、先週と同じ教室にいるとわかるためには、記憶が必要です。

推論による知識や記憶による知識を感覚による知識
に還元できると考えましたが、どうやらその結論は
拙速だったようです。

注 イギリス経験論

- **John Locke**
- ジョン・ロック(1632—1704)は、イギリスのリントンに生まれた。
- オクスフォード大学では哲学および主として医学を修めた。
- 「ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と、激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議制民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家となった。」(『哲学事典』平凡社、「ロック」の項)
- 著作
 - 『寛容論』(1666)
 - 『医術について』(1669)
 - 『人間知性論』(1690)(岩波文庫)
 - 『市民政府二論』(1690)(岩波文庫)

[ロックの問題意識 認識論の登場]

- 「私の居間に、5、6人の友人が集まって、本書とたいへんかけ離れたある主題を論じていたところ、四方八方からおこる難問に友人達はたちまちとほうにくれました。私たちは、自分をなやます疑惑の解決に一步も近づかずに、しばしとまどっていましたが、そのあげく、私はふと、自分たちの道が間違っていて、この性質の探求を始める前に自分達自身の才能を調べ、私たちの知性が取り扱うのに適した対象と適さない対象とをしらべてみる必要があると、思いつきました。このことを私は仲間の者に提案し、みな即座に同意し、そこで、これこそ私たちのまず探求することだと一致しました。」(『人間知性論』岩波文庫、第一巻、p19)

- 「私の目指すところは人間の真知の起源と絶対確実性と範囲を探求し、あわせて信念・臆見・同意の根拠と程度を探求することである。」(33)
- 「もし私たちが、知性はその視線をどこまで及ぼせるか、そのいろいろな機能はどこまで絶対確実性に達するか、どんな場合にはただそうだと判断し、憶測できるだけなのかを見いだせたら、私たちは現世で遂げられるもので甘んじることを学ぶだろう。」(36)

[経験論 すべての観念と認識は経験から生じる。]

- 1、ロックは、生得的な観念のみならず、生得的な原理も認めない。
- 「およそあるものはある」とか「同じ事物があってあらぬことはない」という原理についても生得的な原理とはみとめない。なぜなら、それは子供達や白痴などには知られないからである、という。(43)
- ロックは、理知(reason)という能力が生得的であることは認めるが、それは特定の原理を生得的にもつものではないと考える。
- 「普遍的真理は、事物自身のあり方を適正に考察するとき、このあり方の結果として人々の心の内に生じたのであって、事物について適正に用いられるときは、事物を受け入れ判定するように自然に仕組まれてある諸機能を使って発見されたのである。」(130)

- 20世紀のアメリカの哲学者クワインは、
- アプリオリな知識(分析的真理)と経験的知識(総合的真理)の区別が原理的に出来ないことを主張しました。(クワイン「経験主義の二つのドグマ」(クワイン著『論理学的観点から』飯田隆訳、岩波書店))
- 論理学については、どのような論理法則も将来改訂される可能性があり、経験的な知識である、ということになります。
- ロックの経験主義は、このクワインの主張を先取りしているといえるかもしれません。

- 2、観念(idea)の起源について
- ・観念とは、思考の志向対象である。
- 「およそ人間はすべて思考するとみずから意識するし、思考する間に心が向けられるのは心にある観念であるから、疑いもなく人々は、白さ・硬さ・甘さ・思考・運動・人間・象・集団・酔いその他の言葉で表現される観念のようないくつかの観念を心にもっている。」(133)

- ・いっさいの観念は感覚もしくは内省からくる。
- 「心は、文字をまったく欠いた白紙(タブラ・ラサ)で、観念はすこしもないと想定しよう。」133

- 「どこから心は理知的推理と知識のすべての材料をわがものにするのか。これにたいして、私は一語で経験からと答える。この経験に私たちのいっさいの知識は根底をもち、この経験からいっさいの知識は究極的に由来する。外的可感的事物について行われる観察にせよ、私たちがみずから知覚し内省する心の内的作用に付いて行われる観察にせよ、私たちのへ思考の全材料を供給するものである。」134

- 3、観念の二つの源泉
- (1) 外的対象についての感覚
- (2) 心の作用についての反省

4、単純観念と複合観念

- 単純観念:「心がただ受動的に受け取るだけの観念」(2-7)
- (1)一つの感覚に由来するもの(色、固さ)
- (2)複数の感覚に由来するもの(空間、延長、形象、静止、運動など)
- (3)反省に由来するもの(思考すること、意志すること)
- (4)感覚と反省のいずれにも伴いうるもの(快、苦痛、存在、統一、力、継続など)
- ・「心は単純観念を作ることはできない。」

- <複合観念>
- 複合観念は、の三種類に分類される。
- 「**実体**」:「自分自身で存立する別個な個々の事物を表象するとされるような単純観念の集成」(2-10)
- 「**様相**」:「実体の性状と考えられる複雑観念」(2-10)
- 「**関係**」:「一つの観念を他の観念と考え合わせ、比較するところに存する観念」
- 例えば、「鈍い白みがかかった色、ある程度の重さ、固さ、柔軟性、可溶性」というごとき、それぞれに単純観念であるものがここに結合されることによって、「**錫**」という**実体の観念**が生ずる。
- 例えば、「すべる、ころがる、あるく、はう、走る、おどる、はねる」などは**運動の様相**である。また、さまざまな感情は**心の作用の様相**である。
- 例えば、「同一性」「差異性」「原因と結果」などは**関係**である。

■ 5、第一性質と第二性質

- **第一性質**: 人間によって知覚されると否とにかかわらず、物体そのものの中であって、人間の心に像を生ぜしめる実在的性質。

(**固体性、不可入性、延長、形象、運動、静止**)

(近代自然科学は、第一性質を扱うことによって、

客観性を主張できると考えてきました。

少なくともそれは**定量科学**となりました。)

- **第二性質**: 人間の心の中に(**色、音、香り**などのような)感覚を生ぜしめる力である。

「物体の第一性質の観念は、物体の類似物であり、その範型は物体自身に実在するが、それら二次性質によって私たちのうちに生み出される観念は、物体に少しも類似しないのである。」(191)

■ 6、知識(knowledge)と臆見(opinion)

- ・「およそ心は、そのあらゆる思惟と推理に当たって、心自身の**観念の他に直接の対象をなにももたず**、観念だけを観想し、また観想できる。したがって、明白に、**私たちの知識はただ観念に関わるだけである。**

- してみると、**知識は、私たちの観念のあるものの結合・一致あるいは不一致・背馳の知覚に他ならないように私には思われる。この点にだけ知識は存する。」**

- ・知識に属するのは、次の二種である。

直観的知識

(**自我の存在、「白は黒でない」「円は三角形でない」など**)

論証的知識(神の存在、数学、道徳法則)

- **自然学と歴史学は、臆見に属する。**それらは確実な知ではなく、蓋然的な知(信念)である。しかしながら、**ロックは自然学そのものを否定するものではない。**

- George BerkeleyによるLocke批判
- David HumeによるLocke批判についてはPDF fileの講義ノートをご覧ください。

